



古市公威博士銅像成る

我國工學技術界の元老として至寶的存在であつた古市公威博士が逝去されてから早くも3年になるが、此間に土木工學關係の先輩を主とする朝野の學者名士發起の下に故古市男爵記念事業會が設立され、一般工學技術方面より集まつた寄附金數萬圓を以て銅像建設及傳記編纂等の事業が、各分擔委員により大々進められてゐたが、第一に銅像が竣成したので、

6月5日午後2時本郷區東京帝國大學工學部前庭に於て其除幕式が舉行された。

式場には故博士の長男古市六三氏が千穂子夫人及6人の子女を伴ひ大阪から出席し、親族席には博士の次男堤啓次氏、瀬川昌世博士、林秀三博士の家族が列席され、來賓席には日本の工學會を代表すべき各方面の先輩技術家及び朝野の名士200名餘參列し

て大テント張の会場を満した。

定刻記念事業會委員長井九介博士拍手に迎へられて銅像臺座石壇上に立ち、記念事業會の各事業の經過を報告し、役員としての挨拶を述べられ、次いで故博士の愛孫たる古市治子嬢の手により引綱が引かれてスル々と幕が下されると、御下賜の鳩杖を右手に支へ、ソファに腰を下した老博士の生けるが如き像が現れた。

明治初年フランスに留學して土木工學を専攻し、我國の港灣、河川、鐵道、水力電氣、其他多數の公益工事に身命を忘れて盡力した偉人の風貌は此所に永久不滅の信念を語るが如く見え、暫らくは止まぬ拍手と感激のシーンであつた。

次いで實行委員眞野文二博士立つて長文の式辭を朗讀して、故博士の人格と功績の數々を挙げられ、工學會に對する故博士の偉大なる指導的精神を稱へ、終ると銅像委員たる内田祥三博士が立つて銅像建設の工事報告を大要次の如く述べられた。

工 事 概 要

〔銅 像〕 高さ約6.10米、底面約3平方米、重量約1.5吨

〔臺 座〕

間 口	約 19.39米	(64.0尺)
奥 行	〃 7.18 〃	(23.7 〃)

基壇高さ 〃 0.60米 (2.0尺)

像座高さ 〃 2.12 〃 (7.0 〃)

背面衝立高さ 〃 7.27 〃 (24.0 〃)

〔臺座構造概要〕 構造主體は總て鐵筋コンクリート造にして基礎の深さは約2.42米なり。臺座の設計は廣さ約115平方米の基壇を設け其前面中央には階段を附し後方及左右には石欄を廻らし中央背後には高さ衝立を有す。基壇中に像座を設けて銅像を設けて銅像を据え像座の左右の基壇上にキヤラ一對を植樹す。

使用石材は像座及衝立の中央に廣島縣產黒花崗を本磨きとして使用し其他は全部茨城縣產稻田花崗石を小叩き仕上として使用せり。石材使用量は約500立方米なり。

〔工 期〕 昭和11年9月起工 昭和12年5月竣功

〔工事直接關係者〕 銅 像——堀 進二、作

臺 座——渡邊 仁、懸賞當選原設計

内田祥三、實施設計及監督

吉田 貢、〃

高山英華、〃

津守 繁、〃

銘 方——鹽谷 溫、撰

工藤壯平、書

臺座工事——株式會社安藤組

